

朱鞠内湖集水域の流域環境に対する住民の関心事

永田素彦 三重大学

本稿では、2005年9月に、5-2プロジェクトの研究フィールドである朱鞠内湖集水域および近隣エリアで実施された、流域環境に対する住民の意識調査の結果を報告する。調査の目的は、朱鞠内湖周辺の森林・農地・水系からなる環境のさまざまな側面に対して、住民がどのような態度をもっているのかを把握し、流域環境に対する住民の関心事を抽出することにある。特に、森林、農地、水系がもつさまざまなはたらきに対する関心の構造と、流域環境での活動やいくつかの属性との関連を検討した。

調査は、北海道幌加内町の3集落（幌加内、朱鞠内、母子里）および名寄市の4地点で行なわれた。調査対象者は計61名で、男性43名、女性18名、幌加内14名、朱鞠内9名、母子里13名、名寄市25名、年齢は20-70歳。職業は、農業、林業、酪農業、役場職員、大学教員、技官、大学院生などであった。調査対象者の選定は、昨年度の調査対象者に再び協力を依頼するとともに、新たな調査対象者を紹介していただいた。なお、調査者は、吉岡、松川、坂本、大川、永田の5名であった。

調査は、構造化面接法を用いて行なわれた。この調査は、全国調査のローカライズ版であり、質問紙も全国調査とほぼ同一のものを用いた。全国調査との主な相違点は、流域環境一般ではなく、朱鞠内湖周辺の流域環境について具体的に尋ねたことと、いくつか自由回答項目を加えたことである。主な質問項目は、流域環境（森林、農地、水系）の各はたらきに対する関心の程度、流域環境における活動経験の程度、環境保護活動に対する関心の程度、朱鞠内湖周辺の流域環境に対する意見、流域環境一般に対する意見、などである。インタビューの所用時間は、平均40分程度であった。

主な結果は以下の通りである。第1に、単純集計の結果によれば、人々の流域環境のはたらきに対する関心は、全般的に、非常に高い。ここで、流域環境のはたらきとは、木材生産、林産物生産、風景創出、渇水軽減、国土保全、水質浄化、防音・防風、動植物の棲みか、二酸化炭素の吸収（以上、森林）、穀物生産、野菜生産、乳製品・食肉生産、風景創出、水・土壌保全、動植物の棲みか（以上、農地）、生活用水、工業・農業用水、水産業、風景創出、動植物の棲みか、水質浄化（以上、水系）である。回答者は、「非常に関心がある」から「まったく関心がない」までの4段階で答えるよう求められた。

図1に、森林の働きに対する関心の結果を示す。木材生産を除いてほとんどすべてのはたらきに対して、人々の関心は非常に高い。特に、風景創出、動植物の棲みか、水質浄化

の働きに対する関心が高かった。また、森林、農地、水系、それぞれのはたらきの中で最も関心があるものを尋ねたところ、森林に関しては風景創出の回答が、農地に関しては、動植物の棲みか、水・土壌保全、風景創出の回答が、川・湖に関しては、動植物の棲みか、風景創出、生活用水の回答が、それぞれ多かった。一方、環境保護活動への参加に対する関心や、仕事以外での流域環境における活動経験は、相対的に低かった。

第2に、それぞれの関心間の関連を探るために、数量化Ⅲ類による分析を行なった結果を報告する。数量化Ⅲ類は、個体（回答者）のカテゴリー（質問項目）への反応パターンに基づいて、個体とカテゴリーそれぞれを数量化し、パターン分類を行なう、多変量解析の一種である。図2に、森林、農地、水系のはたらきへの関心について数量化Ⅲ類を行なった結果を図示する。分析に投入したアイテム・カテゴリーは、森林のはたらきへの関心（9アイテム）、農地のはたらきへの関心（6アイテム）、水系のはたらきへの関心（6アイテム）×「非常に関心がある」「やや関心がある」「関心がない（あまり関心がない+全く関心がない）」の3カテゴリーである。ただし、回答者が全体の5%に満たないカテゴリーは除外した。図2に示されているように、すべてのはたらきに対して「非常に関心がある」、「やや関心がある」、「関心がない」の3つのクラスターが見出された。すなわち、環境のはたらきに関心をもつ人は、どのはたらきにも関心が高い傾向にあり、逆に、関心の薄い人は、どのはたらきにも関心が薄い傾向にある。一方、森林、農地、水系の領域や、直接利用価値、間接利用価値の区別については、明確な傾向は見出せなかった。また、活動経験、保全活動への関心についても、それぞれ、同様の分析を行なったが、ほぼ同様の傾向が見出された。すなわち、活動経験の多寡、あるいは、保全活動の関心への強弱について、明確なクラスターが確認された。

次に、森林、農地、水系のそれぞれのはたらきの中で最も関心が高いものを尋ねた質問の選択肢をカテゴリーとして、数量化Ⅲ類を行なった（図3）。その結果、「風景やレクリエーションの場の創出」、「動植物の棲みか」、「水質の浄化や保全」が、明確なクラスターを形成していることが見出された。

第3に、属性別の傾向を報告する。4つの地域間の違いについては、相対的に、朱鞠内と幌加内で、環境のはたらきへの関心が全般的に高かった。また、「風景やレクリエーションの場の創出」に対する関心は、幌加内の人が高傾向にあった。関心と職業との関連については、観光関連の人々が「風景やレクリエーションの場の創出」に強い関心を持ち、農業、酪農業の人々が「水質の浄化や保全」に強い関心をもつなど、一定の関連が見出された。

最後に、自由回答の結果を報告する。「朱鞠内湖周辺でなくなってほしくないもの」については、約半数が「森」と回答していた。また、「今後、朱鞠内湖周辺の環境について、どうなってほしいか」という質問に対しては、概ね、現状の自然を維持したいという声が強

く、観光地としての発展を望む声もあった。

全体的に、流域環境への関心は高い。分析結果を総合的に判断すると、人々が最も関心をもっているのは、「風景やレクリエーションの場」としての環境である。その他、「動植物の棲みか」、「水質の浄化や保全」への関心が高い。また、流域環境のある側面に関心が高い人は、他の側面に対する関心も高い傾向にある。今後、これらの結果をシナリオアンケートの設計に活用する。

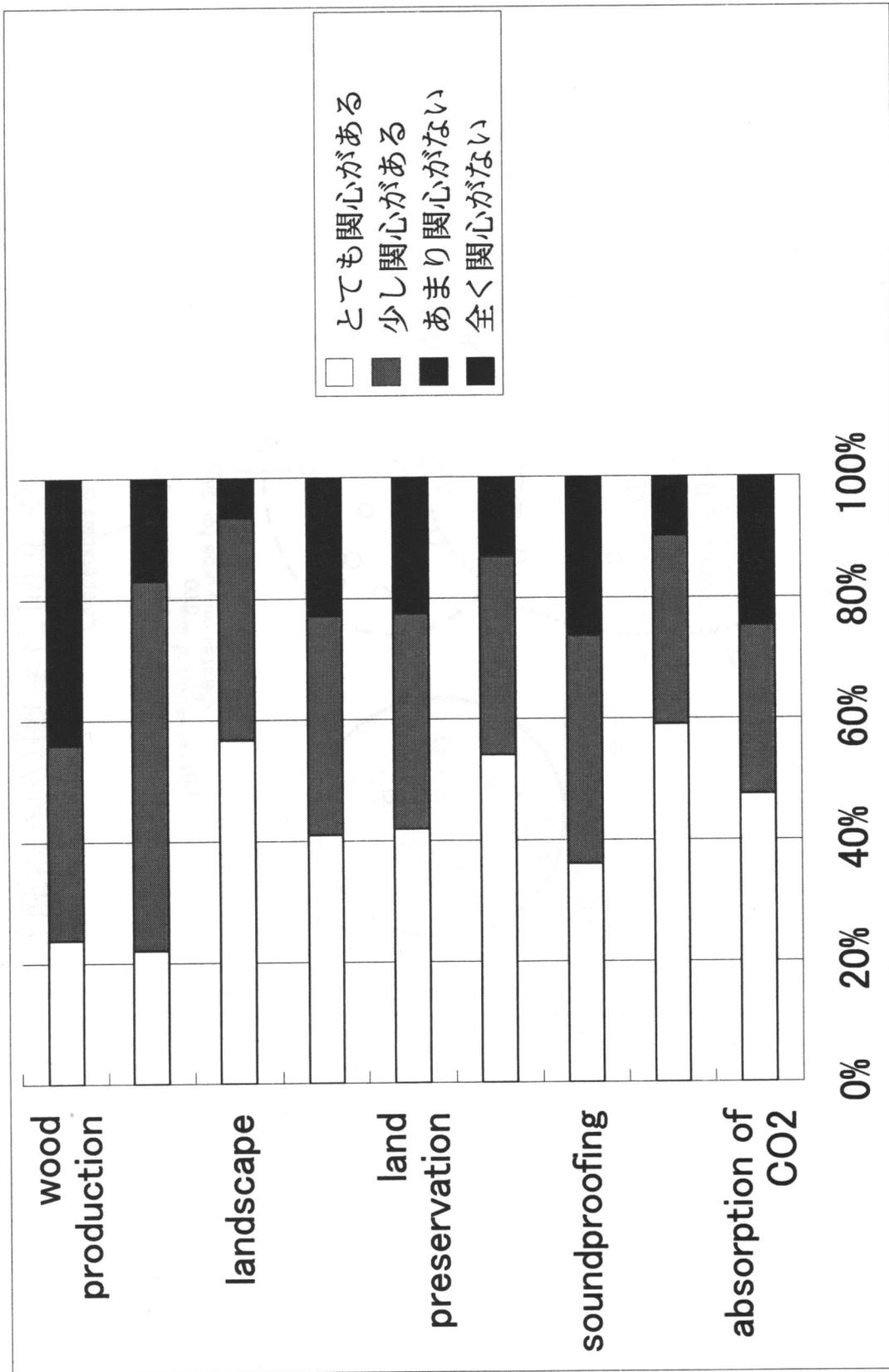


図 1 森林の働きに対する関心度

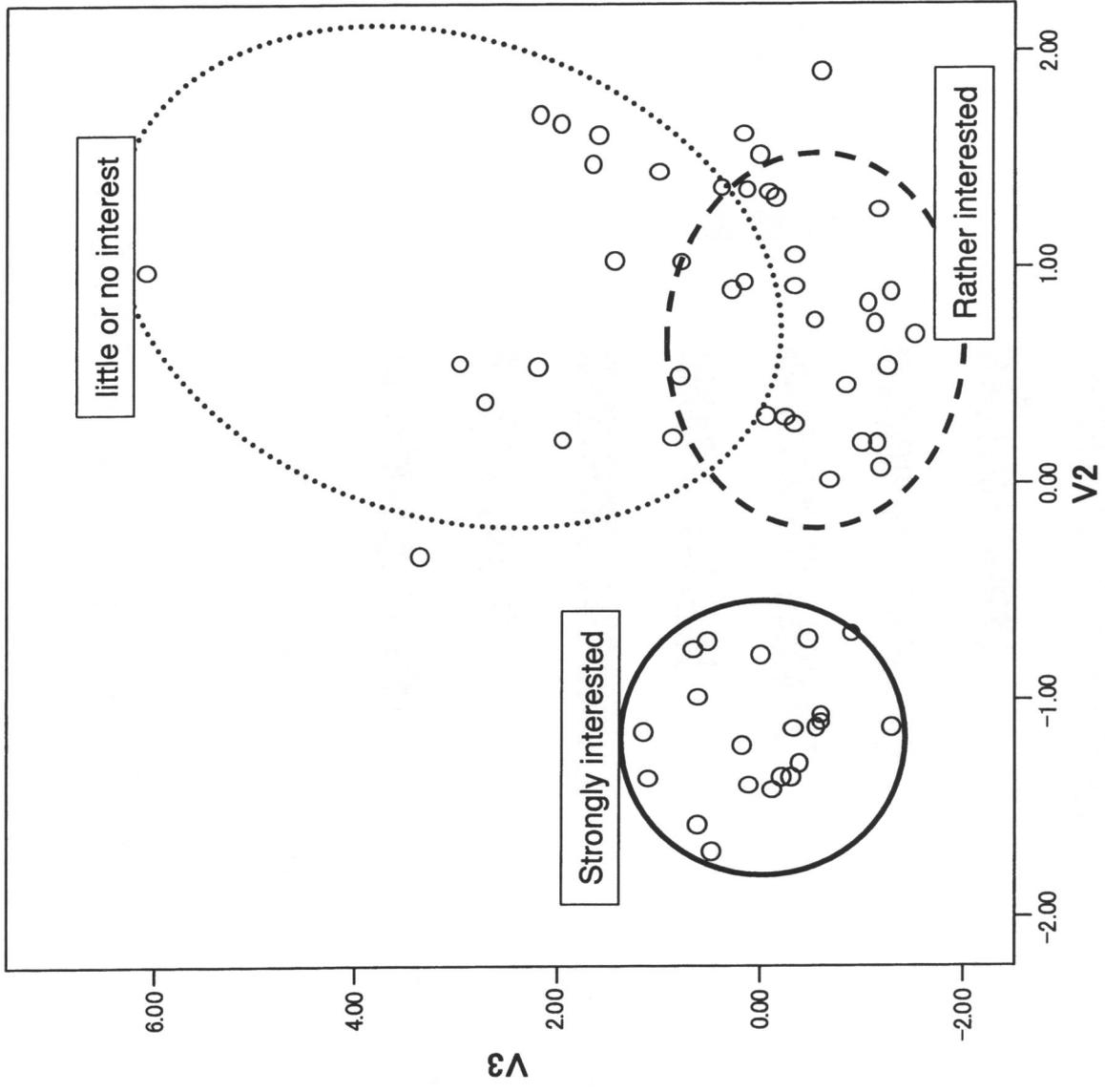


図 2 流域環境の働きに関する関心度の関係

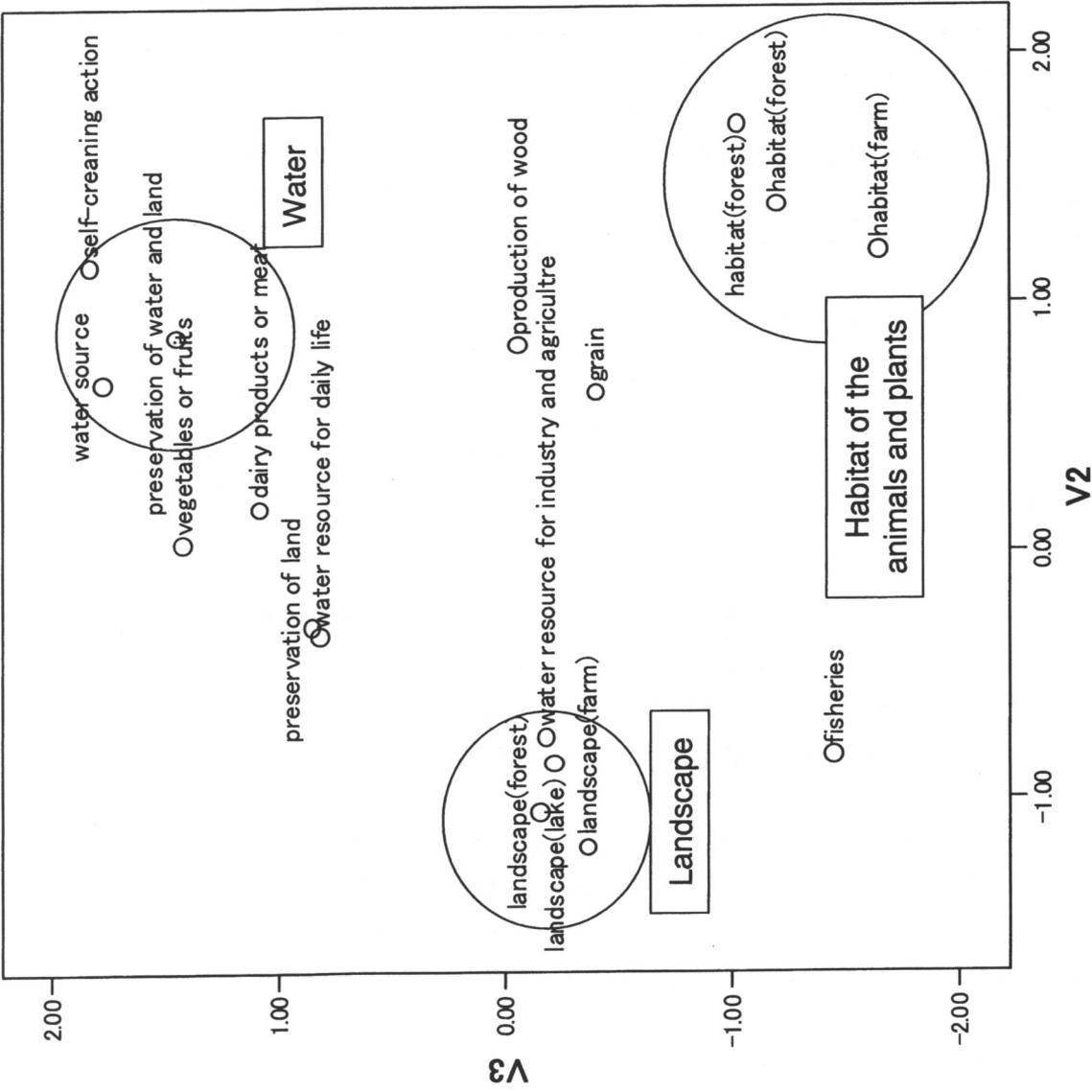


図 3 流域環境の働きの中で最も関心が高い項目間の関係